

特別記事

吉野の山と生きる

写真：白谷寛





※※頁～※※頁写真／神谷（こうのたに）のショウジ山（標高984m）の100年生の杉が生える斜面。間伐を終えたばかりの美しい山を見る。ここでは架線集材を行っているので、架線を張るために木を伐採してできた線道（せんみち・索道）が中央に見えている。人力で1,300m～1,400mの架線を張り、間伐を終え集積場まで下すのに半年を要する。黄緑色の葉が茂っている大樹は鳥の運んだ広葉樹

右頁写真／吉野の山は急斜面なので作業は危険を伴うが、丁寧な作業が行われている。急斜面を線道が集積場まで真っ直ぐに続いているのが見える

左上写真／山守である、カクキチ木材商店の下西洋三さん。「時代がいいときは贅沢しない、逆に悪いときは頑張って次の代に繋ごう」と山の手入れを行う

左中写真／頂上の木にかけられた山仕事の道具

左下写真／架線を支える立ち木が太いワイヤーで痛まないように養生する

右写真／間伐された100年生の杉はカクキチ木材商店の焼印が押され市場に卸される。目の積んだ色の綺麗な杉材は、一本一本違った個性をもつ。市場から製材所、設計者・工務店の手を経て私たちの住まいとなる

吉野林業の歴史

奈良県の60％は吉野郡です。その吉野全体を吉野林業の地域ともいいますが、本来の中心地は吉野川上流域にある川上村・東吉野村・黒滝村を中心に構成されています。

そして、江戸時代には、造林技術の発展、借地林制度、山守制度による山林管理制度の確立によって林業地帯として進展を遂げてきました。明治期に入り、集約的な施業による近代林業の範として順調に発展を遂げ、現在の吉野林業の基盤を確立してきました。

昭和10年代に入り、吉野町に木材工業団地が形成され、鉄道の開設と共に吉野材の流通が飛躍的に拡大し、現在約60企業により製材工業団地を構成しています。長伐期・多間伐施業の生産活動と、製材業及び製箸業等木材関連産業の発展によって林業木材業界が一体となり、吉野に循環型の木材産業地帯が形成されました。植林の歴史は、足利末期(1500年頃)川上村で行われた記録があります。一般に吉野の材が多量に搬出されるようになったのは、豊臣秀吉が大坂城や伏見城の建設を開始するなど、畿内の城郭建築、神社仏閣の用材としての需要が増加し始めた頃からで、その後江戸時代には幕府の直轄領となりました。また江戸中期以降は、酒樽に用いる木材である樽丸の生産が盛んになりました。

吉野林業の特徴

吉野林業の施業特徴は、密植多間伐^{*1}長伐期施業にあります。そのため、100年以上の山林経営を続けるには親子4代もかかることとなり、林業経営の維持が難しくなります。そのため、大資本の所有者と地元の山守^{*2}によって古くから山林が維持されてきました。吉野独特の長伐期の林業経営です。

そして磨き丸太生産は、京都北山に次いで古くから行われており、吉野では長伐期施業の間伐材から生産する方法と、短伐期施業による方法とにより多様な施業が行われています。このように多品目の木材を生産しているのも、吉野林業の特色と言えます。

今後の課題

近年の林業・木材関連産業を取巻く環境は、「外材輸入の増大」「木材価格の低迷」「木材流通構造の変化」「住宅建築様式の変化」等により価格流通量共に厳しい状況にあります。反面、最近の外材価格の上昇により国産並材の流通が増加し、産地間競争がおきています。

しかし、優良材生産を中心とする吉野林業にとって、「木材流通構造の変化」「住宅建築様式の変化」は、既存の流通ルートでは対応が難しい状況にあることは確かです。現状を打開するには、最終消費まで捉えた、産地主導の販売促進等の改革が必要と思われます。そして、エンドユーザーの多くの意見を反映させるため、多くの人達が吉野林業に吉野材に、親しむ場の提供を広げていくことも大切であると思われます。

吉野中央森林組合HPより

- *1 密植多間伐／植栽本数が1ha当たり8,000本～10,000本という超密植が特徴。その後弱度の間伐を数多く繰り返す
- *2 山守（やまもり）／「借地林業」「山守制度」という独特の山を所有する者と山を管理する者を分ける制度。元禄（1688年～1703年）の頃に始まったと言われている。山守は所有者に代わって山を管理し、木を育てる。木の購入権も優先的に認められる。所有者は山守を信頼して山仕事の一切を任せる。山守も所有者を信頼して一生懸命に山仕事をする。地質・気候条件と、人と人の繋がり、それが吉野林業を支えているといってもいい。木の生産から流通までのルートが整っているのも吉野林業の特徴。木を植えることに始まり、何十年、何百年も育てて、伐った木は乾燥・製材を経て、市場へ流れる。吉野では林業の川上から川下までのすべてを地域でまかなっている



△四角に吉の字のカクキチ木材商店の焼印 写真＝下西洋三



一本の木をあますことなく使い切る
山のため、環境のため、人のためとなる製材

阪口浩司（阪口製材所代表）

山を守り続ける人々に感謝することから始まる

古くは室町時代より人工林としての歴史がある吉野。樽丸林業が盛んであったため、真っ直ぐに伸びた節のない緻密な年輪の木材を提供してきた。木は放っておいて勝手にできるものではない。先人たちが植林し、手入れをしてくれたおかげで、直径1m、樹齢350年もの大木に成長する。そして一本の木が住まいを形成する部材として姿を変える。我々は木に感謝し、製材という工程をもって住まいを提供する。こうして自然に逆らわず営み続けていくことが、山のため、環境のため、人のためとなると考えている。

日本最古の木材団地吉野——その発展と現状

全国にある製材工場の総数をご存じだろうか？ 1974年には24,000社あったという製材工場は、現在3,750社。さらに20年後には2,000社をきると予測される。日本で一番古い木材団地である吉野の現状も同じだ。最盛期には120を数えたが、今では34社の製材所がしのぎを削るのみである。

折しも、時は建設ラッシュの高度成長期。旺盛な需要に生産が追われ、少品種を大量生産することで製材業界は発展してきた。とくに吉野地域は、川上に森林資源があり、戦前に国内で第一番目に発足した木材工業団地であるという経緯から、大戦中は軍用材を生産し、戦後は不足する木材を補うべく、フル稼働してきた地域だ。その生産品目は一般に木材でつくれるものはすべて生産していたと言っても過言ではない。

しかし輸入材の乱入、不況と時代は移り変わり、今まで優良材だと自負していた品物も少しずつ売れる量が減っていった。このままでは何も売れなくなる……。

消費者を考えた結果——天然乾燥への道を歩む

当時は多くの工場と同じく、阪口製材所も製品を販売するのは流通のみだった。その結果、本当のお客様は誰か、ということを考えていなかったように思う。つくった製品を一番目に買ってくれる人、つまり製品市場や問屋がお客様だと信じて疑わなかった。製材所というのは木造建築のひとつの単なる「部品屋」。部品屋である限り自分たちが出荷した材がどういう使われ方をされているか分からない。もちろん、乾燥もなし、木材の短所さえ理解していなかった。

天然（自然）乾燥を始めたのは、エンドユーザー（施主）不在の流通に疑問を抱き始めたこの頃だ。未乾燥のまま出荷することが製材所の役目のように思っていたが、市場より先では乾燥材を求めている。木材の需要が冷え込むなか、どうせ直ぐにはお金にならないなら、確保している原木を挽き積みみて乾燥させておこう。こうして始めた天然乾燥材が現在の原点となった。

木材は山に育っていた木を伐り出し、皮を剥ぎ、刃物で製材する。製材されたばかりの水分を多く含んだ瑞々しい材木、その強度を保ち、材木の割れや反り、シロアリやカビを防ぐために乾燥させるのだ。乾燥には重油を燃焼させた乾燥炉内で2週間～3週間おく人工乾燥と自然乾燥がある。化学燃料を使わず、乾燥工程樹脂分が流れ出ない自然乾燥は、木が本来もっている色艶があり、粘り強く、そのメリットは計り知れない。しかし乾燥には最低でも1年は要し、その間、木材を寝かせておく膨大なスペースが必要になる。さらに割れが出ないように細工したり、カビに注意をはらったり、養生中の手間は大きい。1年から1年半以上、自然乾燥された木材は修正挽きして、ようやく製品となる。



安全と安心のためにできることは何か

家は単品の木材だけでなく、いろいろな部材が寄り集まって出来るもの。しかし自然乾燥の木材でまかなうには、供給が追いつかないというのが現状だ。ならばいっそ全部の材を我が社でつくり、提供することを使命にしようと決意したのが今から25年前。ターゲットはエンドユーザー。注文を受けて木を挽き、そっくり工務店や設計士に提供する。「邸別発送」と名付けたこの直売に、年間100棟の注文がある。そのために常時100軒分の木材を、五條市と吉野町合わせた1万坪にストックしている。土台や構造材、羽柄材、造作材、建具材はもちろん、テーブル板、ガーデニングの材料、薪ストーブの薪……、施主が望むものすべてを用意した。こうして「〇〇様邸の木材はすべて阪口製材所」という実績は、設計士や工務店の間でも認知されていった。理想とするのは、「山側・製材所や建築家・工務店や施主」の三位一体の家づくり。何よりもまず、害のない材料（安全）で強度があり災害に強い、健康な家をつくり、施主に気に入ってもらうこと。そして設計士、工務店が求める寸法の杉・檜を納期通りに出荷することで安心感を与える。製材によって部位の寸法を整える。製材によって部位の寸法を決め、用途によって製材する木を考えて、1本の木を“適材適所”で使い切る。端材は割り箸に、木屑はパルプにと、最後の一片まで無駄にしない。

また問屋や小売などを通さない直売は流通コストを省く。製材所から施主に届くのには、問屋などを通せば、いい木で2倍の値になる。平均すると1.3倍くらい。それがわからない。規格外の大きさの製品は割高になるが、大きめ、長めなどすべての材を規格外寸法で持っているから理解されている。

そして、もうひとつ提唱しているのが、山に来てください。施主や設計士、工務店のほとんどを製材所に連れてくる。施主はそこで木について学ぶ。木の香り、肌触り、温もりに感動する。この木を使いたいとその場で選ぶこともある。立木の生える山に入り、製材所工場内では長い年月、養生して出荷を待つ木々の姿を見て、修正挽きされ出荷される様を知ってほしいと願う。自分の家の木を自ら見て感じ、思いの詰まった家をみんなで一緒につくるために。

さかぐち・こうじ／談
『奈良の木モデルハウスBook』（2015年4月刊）加筆・訂正

右写真／五條事業所で雨風にさらし自然乾燥されている吉野材は、阪口浩司さん、勝行さん親子が集めたもの。あらゆる注文に応えるため、針葉樹、広葉樹、丸太材、角材、板材などさまざまな材をストックしている

上写真／五條事業所で吉野の林業について、川中である製材所の役割を熱く語る阪口勝行さん

左写真／広大な敷地の五條事業所では、たくさんの材が出番を待つ



対談

吉野の木で家をつくる

阪口勝行（阪口製材所）

×

西浦敬雅（建築工房en）

×

吉村 理（吉村建築設計事務所）

吉野材をはじめとする国産材の普及に向けて、川中の役割を果たすために奔走している阪口製材所の阪口勝行さんの呼びかけで、一緒に仕事をされている西浦敬雅さん、吉村理さんに集まっていただきました。ご両人とも奈良で吉野材を使った建築を精力的につくっています。外材が安く手に入る現状のなかで、国産材を普及させるのは簡単ではありませんが、まず山の現状を知っていただき、川上・川中・川下が何を考え、どう連携していけばいいのかをお話しいただきました。

*

阪口 今日はいつも一緒に仕事をさせてもらっている西浦さんと吉村さんと、吉野の木の将来の展望についてお話ししたいと思っています。吉村さんが吉野の材を使うようになってしたのは、どういった経緯でしたか。

吉村 東京の團紀彦建築設計事務所にいた20年以上前は、世の中では木造が今のようによくローズアップされていませんでした。当時、稲山正弘さんがめり込みの研究をされていて、木の伝統的な構法にちかい金物を使わない接合方法を徐々に世の中に広めていた時期で、木造に興味をもちました。2006年に奈良に戻ってきたときに、叔母が阪口さんの会社で働いていたということで紹介していただきました。

阪口 西浦さんは工務店に勤めていたときに知り合って、その後独立されて今に至るのですが、今自邸として住んでいる「吉野MIX」の設計・施工をしていただきました。その出会いの話、なぜ吉野杉に特化したのか聞かせてください。西浦 一番近い木ということがありました。イメージでは雨が多い地域で、油分が多いというのが特徴ということと、「吉野サロン」を設計された三澤康彦さんが関わっていたMOKスクールに行かせていただいて、その後独立

したときに、吉野杉ありきというかたちで、ほかの木を使うということはもともと考えていませんでした。

阪口 ご一緒させていただくようになって何年くらいになりますか。

西浦 20年くらいですね。

阪口 吉村さんはどちらかというと木の見える真壁づくりに特化していて、吉野材を使っているというところ、木を見せる家づくりについてお聞きしたいのですが。

吉村 阪口さんに紹介していたいて、山守の下西洋三さんのところに行つて山を見せていただきました。大径材が問題になっています。ヘリ集材になって、2番玉以降の材の値段よりも輸送費が多くなつてしまつたため山に残されています。材がほとんど大径化しているので、小割の小さな木を使うのではなくて、大きな吉野杉を使うことに魅力を感じています。

阪口さんから設計のお話をいただいた「ラ・ベッシュ」（洋菓子店舗）は精力的に大きな木を使いました。店舗では曲がつた巨大な梁を何本も使っています。曲がつた材をもう一度製材すると材積が減つてしまうので、曲がつた材をそのままできる限り無駄なく使いたいと思いましたが、カウンターは天然乾燥で栈木積みしたものをそのまま使いました。

店舗は施工期間が短く、改修がしやすいようにあまりつくりこまずに、改修や転用できるように心がけました。吉野の杉は大きいので、その大きな木のもつ魅力を意匠的にも機能的にも見せたいと思っています。

阪口 1本の木をまるごと使い切りたいたいと思っているので、真ん中で柱や梁をとったり、周辺部で板材や割り箸や下地材をとったりすること、を普段から考えていて、できるだけ山にお金を

返せるようにしています。「吉野サロン」は真壁の建物だったので、「吉野MIX」は大壁の家にしたいと思って、西浦さんをお願いしました。白い大壁の家が素敵だなと思っています。どういふ思いで大壁の家をつくられていますか。

西浦 ああいう内装が好きですね。学生の時に建築の勉強をしてきたわけではないので、会社員になって現場で作業をしてきました。そのときに『住宅建築』で永田昌民さんの特集号に魅せられて、建築に興味があつたので独立して設計施工に携わるようになりました。そのときに

永田さんがフランク・ロイド・ライトと繋がりがあつたということを知りました。言葉に現わしにくいけれど気持ちのいい、飽きがこないようなものが住宅ではないかという思いがありました。10年後、20年後にさらに良くなつていつて飽きがこない家、いろいろな存在を消していくような設計といえますか、そういうものに憧れています。大壁に拘っていたわけではないのですが、そちらの方が多くなりました。

吉野の山の現状

吉村 吉野林業という大きな話でいうと、下西さんも言っていました。戦後植林して、それ以前に植えた大径材が問題になっています。150年経つて径がすごく大きくなつて、そのあたりの話をお聞きしたいのですが、もう少し径の小さな材から柱をとるか、既に流通のシステムが確立している状況で、径が大きくなつた材に対して、大径の横架材を供給していくシステムを確立することで、大きな材がとれるならエンジニアウッド、集成材ではなく、吉野の大径材を使って中規模の施設や非住宅、住宅でももう少し違ったかたちの住宅が出来るのではないかと思うのですが、径が大きくなつてきている材に対して、新しい取り組みを考えていま

すか。

阪口 吉野は他の産地と違って、皆伐をしていないので小さな径から大きな径まですべて採れます。ここで完結するので、遠くから持つてこなくてもいいので、できれば地産地消でいきたいということは常に思っています。わざわざ化石燃料を使って運ぶ必要はないので。もっと遠い海外から化石燃料を使って持つて来るのはいかなものかなと思います。関税がかからないのでそうなるのですが、安価であつた事と定寸で多量に入つて来た事、国産材の使用が減少したため、結果として山は弱っています。

吉村さんの質問にここまで答えられるか分からないのですが、確かに山の木が大径木になつていて、1番玉、1番根つこに近いところ、それから4mだとしたら2番玉までは使えますが、そこから上は山から出してきたても伐出費が高くなつて、採算が合わないんです。だから少なくとも適正価格だけは守つて出荷したいと思っています。製材現場だけでは分からないので、山の現場も見せてもらい、どういう使われ方をしているのかも見せてもらいました。現場に落とし込んで材料を出荷していくことは常に考えています。答えはすぐに出ないのですが、設計者と一緒に答えを見つけていこうと思っています。

少し前の藤本昌也さんと田中文男さんの考えた民家型工法では、節のある材を使って家をつくつてきました。それは悪くはないと思うのですが、綺麗な木がとれるのでそれを有効的に使つてほしいですね。吉野で吉村さんに発注できるような小学校、中学校の校舎などが出来るというのが、吉村さんに頼んだらいいものが出来る。吉村さんの設計を取り上げるメディアがあつて、もっと広く知つていただければ、私設の老人ホームや保育園などは集客のために広告を打たなくても発信することができる。その



ことを思えば設計料は安いもんだと思います。そのための建築家です。そういうことを民間でも市町村、国であっても、吉村さんのような建築家に頼めるようにすれば、木の文化、発展にも寄与すると思っています。

吉村 僕は吉野から近い御所市に住んで、仕事をしていますので、自ずとほかの地域の材を選択することはないですね。せつかく近くにこんないいものがあるんだから、吉野の材を使います。最近では市町村も何かあったら木を使っておけばいいという感じもあります。奈良県なら吉野材を使っておけば、みんな納得するだろうという感じはあります。それは昔と違ってきています。吉野の林業としてはそれを逆手にとつて発展に繋げていけばいいと思います。大径材の林地残材をちよつとした量を使うだけでは解決しないので、かなりの量を動かさないと。それだけのストックが山にあるので。そういうシステムを考えていきたいと考えています。

阪口 西浦さんは公共事業、非住宅の話が来たときに、つくれる体制が工務店にできないという話を聞きますが、工務店同士がジョイントするというのは考えられますか。

西浦 結局は組織というよりは職人の数ということになってくるので。デヴェロッパさんやそういう仕事ができる工務店さんが町にいらつしやるので、無理やり僕らがジョイントして職人さんを集めると、うちに来ていただいたお客さんにも迷惑がかかります。職人さんの育成の方が先だという感じがあります。基本的に建物は大きくても小さくてもやることは一緒なのであとは人手の問題になります。「吉野MIX」では地元の和紙を使っていますが、和紙を貼れる職人さんがなくなっています。若いクロス屋さんは、和紙を貼れなくても仕事をやっていきます。和紙を貼れるようになっても給料が高

玉しか持っていけないというのが厳然とした事実としてあるということは下西さんも言っていましたけれど、結局架線集材に戻すしかない。先ほどから話に出ています、架線集材に戻すと職人にお金をしっかり払っていかないとけない。ただ、林業の現状はそのお金を払えないほど材価が低い。このシステムから変えていかないと厳しいと思います。そのために大径材だけれど、阪口さんは節があったり、虫食いがあつたりするので使にくいと言いますが、それでも吉野杉の大径材は2番玉3番玉でも魅力があると思います。それが今は山に放置されて使われていない。非常にもったいないと思つてるのでそこに未来に向けてのポテンシャルがあると思います。活用していくやり方をすでに考えています。まだ構想段階ですが、いろいろなところで試していこうと思つています。

阪口 西浦さんはどうですか。
西浦 加工もしやすいですし、綺麗ですね。阪口さんのところは天然乾燥されているので、それが一番の魅力です。やはり人工乾燥されて中が割れている木よりも、外が割れている木の方が素直でし、強度も損なっていません。自分が家を建てるなら天然乾燥の材がいいなと思います。小さい会社なので、自分が欲しいものしか売りたい。正直な家づくりとなると自分の好きなものになります。扱いやすくて、年輪も細かい。天然乾燥の香りも考えると唯一無二だと思います。

最近では節とか割れに対しては厳しい目で見える方もいますが、こういうものが普通だよということや町がアピールする場がない。幼稚園とか小学校レベルで割れて節がある木を使つた空間にいれば、それが普通だという認識になると思うので、ぜひ建築家の方に頑張つてほしいですね。節や割れがあつてもいいので、自然のこの

くなるわけでもないので、必要がない。自然素材でやる仕事はほとんど難しくなっています。こういう仕事は単価が高いということや言えたらいいのですが。結局、給料が安いから人が集まらない。山に限らず施工の方も一緒に聞いています。

阪口 吉村さんは学校で教える立場ですが、学生の建築をしたいという意欲はどうですか。

吉村 ハウスメーカーやゼネコンや職人、大工になりたいという子もいます。しかし結局、先ほどもお話が出たように、お金の問題はかなり大きいと思います。やりがいでだけ仕事をしてくれというのはなかなか難しい……。

西浦 限界を超えています。僕のところはもとも工務店の一人工が2万円を切つてた時代に、2万2千円払つて職人を集めていました。うちは大工を常用していますが、電気屋、設備屋などは単価を稼ぐために、4人くらいで来て2日間で終わらせたいという仕事のやり方です。この「吉野サロン」のような仕事は1人で2日来て、1日休んで2日来てというやり方です。だから、非住宅の方に設備屋が流れて、住宅には少なくなっています。

適正価格での普及のための取り組み

阪口 僕らの扱つ吉野杉、吉野檜のもつポテンシャルについてどうお考えですか。

吉村 強度も、見た目もそうですが、素材としての総合的なクオリティーは全国に名を知られていることが象徴するように、しっかりとしています。阪口さんをはじめとして山に携わる皆さんが愛着をもっていますよね。お客さんもすごく喜んでくれます。昔からもつている、これからも続くであろうポテンシャルですが、それだけでは吉野林業も厳しいですね。ヘリ集材ではヘリ1台の燃料費にも満たないので、一番

素材はそうなりますよということがクレームになつている現状があります。

阪口 意見を聞かせていただいて、幼稚園や小学校でそういうもんだと分かつてもらつて、育つてもらえればいいなと思いましたが。ただ納材する場として、公共施設、幼稚園、小学校の仕事をもつたとしたら、工務店にそれを納めたらこんなあかんやないかとクレームが来ます。欠点ではなく、性質である事を説明して理解してもらつように努めています……。

西浦 それは強度の問題ではないので、大丈夫ですと言わないといけない。ですが、一番は施主ですね。施主が見てそれが普通だということを理解しないと難しいですね。

川中からの発信

阪口 川上の山があつて川下の施主、設計事務所工務店がいて、僕は川中の立ち位置だと思つています。川上の人が町へ出て吉野の木を使つてくたさいと言ふのは難しいと思つたので、それをやってきて25年経ちました。父が自由にやらせてくれたこともあつて、現場も見に行つて見学会などを開催してきました。川上の山や川中の僕たちに対してエールがありますか。

吉村 木だけを表面的に使つて、恰好いい建物をつくるという考えではなくて、それは阪口さんと出会つたことで川中のことも知れたし、下西さんを紹介していただいて川上のことも知れました。残材のことも知れましたし、架線集材がなくなつて山から木を出せない現状を聞いて、それを建築の空間をつくるヒントにできました。仮に大径材を使つて今までにない新しい空間をつくることができたなら、それが川上、川中のためにもなると思います。川上、川中のことを知つたからこそできることがあります。やはりたくさん木を使つというシステムをつくる



※写真／「吉野サロン」土間での座談風景。右から西浦敬雅さん、阪口勝行さん、吉村理さん。「吉野サロン」は阪口製材所が2010年に吉野材を使って建てた展示場。三澤康彦さんの設計、ツキデ工務店の施工。建具にも吉野材を使用している
上写真／左に2012年竣工の展示場「吉野MIX」、右に「吉野サロン」を見る。現在「吉野MIX」には、見学者を迎えつつ、阪口勝行さん家族が暮らしている
下写真／道路側から見る2棟の外観。サロンは和風の棧瓦葺き屋根に真壁、MIXは洋風のガルバリウム鋼板壁ハゼ葺き屋根の大壁でそれぞれの良さを伝える

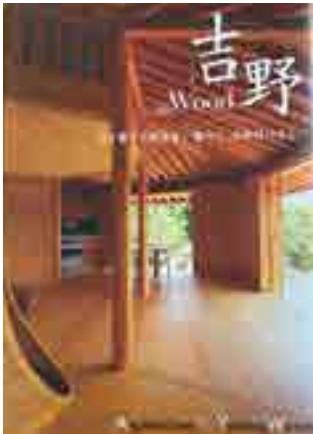


吉野サロンのタイル貼りの土間、ダイニングキッチン、和室を見下ろす

ことが大事だと思います。木を扱っている工務店さんのグループがあつて、そういう人にもどんどん仕事をさせていただいて。年に1棟木の公共建築が建つても、あまり山に恩恵はない。梁に集成材やCLTを使っていると意味がないかなと思います。なので、新築だけではなくて既存の古い公民館や市役所、学校などRCの建物を取り壊すのではなくて、内装に木を使って断熱リフォームをしながら既に多く存在するストックの改修に目を向けていく。既に学校の教室木質化を研究されている方もいます。既存住宅の木質化もいいと思います。それくらい思い切ったことをしないと山の木は動かしていけないのかなと。

阪口 ある県は製材所、木材市場、木造建築物などを見学すれば、旅費の一部負担しますと県をあげてPRしています。また他県では県庁の職員がアテンドを行います。木材を使つてもうために製材所と一緒にツアーを組んでいます。そのような資料をまとめて奈良県庁の昔のブランド課、今の促進課に伝えました。林産県である本県はトップランナーである必要があります。奈良県と共に木材産業を活性化していきたいと考えています。

吉村 吉野杉の売り上げは横ばいですが。阪口 普通に営業して横ばい。何もしなかった



『吉野 the Wood 木を愛する建築家が魅せる、吉野材の住まい』
阪口製材所が制作したパンフレット。設計者と共同し、吉野材の魅力を伝えるための本。西浦さん、吉村さんをはじめ、吉野サロンを設計した三澤康彦さん、横内敏人さん、堀部安詞さんなど9人の侍（建築家）が吉野材を使って建てた住まいを紹介している。この本をきっかけにして、阪口製材所に依頼があれば、阪口さんから設計者に設計をお願いし、共同してよりよい住まいを建てることができる

べると少なくなつたと感じています。

阪口 建築において素材を料理するのが建築家だと思っています。だから、建築家BOOK『吉野 the Wood』（上写真）をつくり、建築家に向けて発信しました。建築家だからこそ、より

ら沈んでいきます。

吉村 上がることはないですね。

阪口 建築の着工数が減っていますから。

吉村 そもそも人口が減つて、住宅の着工数が減っていますから、既存住宅の改修ですね。それと非住宅の木造化は国も推していますから。阪口 金利が上がりました。商材が上がりました。でも、物価が上がっているのに給料は上がっていない。30坪3、000万円で計画していたけれど、見積りをしたら4、000万円になった。それでは無理なので、予算の3、000万円にしようと思ったら20坪の家になつてしまします。設計が難しいですね。

西浦 コンクリートの値段が上がっているというところもあると思います。20年前の3倍になっています。基礎も3倍になりました。先日台湾の方の住宅をやらせてもらいました。台湾は台風が多いのでほとんどがRCなんです。単価8、000万円です。かといって日本と比べて給料がそんなに多くはない。だとすれば日本でもできるはずです。吉村さんが言つたように改修も多いと思います。RCなので改修しやすいですから。日本は湿気が多いので、できれば木造で乾燥する家がいいのですが。そういったところで給料の中の割合で、どのくらいを住宅のローンに充てるかという割合が、日本は昔に比べて

吉村 それは強度の問題ですか、お金の問題ですか。

西浦 多分安全が。

吉村 安全基準ですか。

西浦 今でも丸太を使つておられるのは、解体屋くらいではないですか。昔は塗装屋が吹き替えをするときには足場丸太を使っていました。木の足場に若い子は乗りましたがらないでしょう。番線で結んだだけの危険なものに。バラ板という手法もなくなりましたし。一本からとれるところがほぼ捨てられている状態ですが、お金はそういうところから集まるのかなと思うと、外構の何かに使つとか。建材屋が来て焼杉の板やデッキ材はどうですかと、製品で来られることが多いので。そういった板物であれば定期的に替えていくものなので、それをアピールするべきかなと思います。メンテナンスとしては工業製品だと同じ物が無くなつたりしますが、木でしたら何百年経つてもあるものですから。そういったメンテナンス材として使われれば、捨てられている木が売れる木になるかなと思います。需要の問題だと思いますが、捨てられる前に何かに使われてから捨てられるシステムがあればと思います。

阪口 端材の中でも節や虫が喰っているものをチップにして、もう一度命を吹き込んで紙として使われています。バイオマスの原料になると、そのまま燃やされてしまうので切ないです。

西浦 割箸が森林破壊と言われた時期がありました。マイ箸というのは、僕はちよつと……。サラリーマン時代に吉野の杜ネットワークで阪口さんと出会つて、そのときに初めて紙や割箸が少しでも林業を支えているんだなということが分かつたので、マイ箸のブームがきたときには、歯がゆかつたですね。吉野杉の割箸はお客様さんに渡すと喜ばれます。普通の割箸と比べる



右写真／「吉野サロン」柱には樹種が記されている。手で触れることのできる柱に吉野材を使用し、その感触を体験してもらえるようにした。左に見えているのは床材のサンプル
左写真／「吉野サロン」入口にかかる暖簾が初夏の風に揺れ、見学者を招き入れる



右写真／「吉野サロン」土間開口部から栈積みされ自然乾燥している大量の杉材が見える。背板の有効利用を考え、割り箸の最高級品、利休箸、天削（てんそげ）箸の資材となる
左写真／「吉野サロン」櫓の柱を見る



「吉野サロン」和室



「吉野サロン」ホールからダイニング方向を見る。真壁造のシンプルな空間。杉を使って照明器具も製作されている

と少し高いですので、お店が使ってくれないんですよね。お蕎麦を食べるときにはいいですよ、言ったんですけどね。

木の魅力を地道に伝える

吉村 阪口さんの大径材を使って落とし込み板壁 通常よりはものすごく大きい板を使うことで、稲山さんから高い壁倍率がとれると言われ、大きな厚板を使った落とし込み板壁で住宅をつくったことがあります。お施主さんも喜んでくださいました。断熱性能も上がります。大径材だからこそ構造的にも有利に働きます。僕は梁ではなく、乾燥もしやすいですし大判の板にして大量に使いたいですね。

阪口 五條に7、500坪のストック場がありますからできます。出荷することが分かっていたらストックします。今も出るか分からないのに大量にストックしているんですから、しんどいです。しかしすぐ出そうと思っただけで持っていないとできないのでストックしていますが。案



虫食いや節、割れの入った材はチップにして、製紙会社に納められ、紙の原料となる

阪口 吉野の急斜面を上がって山仕事をしているのを知ってもらう方がいいのかもしれないね。例えば、スパルタなツアーを企画しますか。玉伐りもやってもらって。きちんとした山ツアーをしたらいかなとは思っています。少しきつい山でも歩いてもらいます。ほどほどに疲れるくらいに。

吉村 それだったら学生を連れて行けます。

西浦 製材まで見れるんですか。

吉村 そつです。

西浦 いいですね。

阪口 木の魅力を地道に伝えていくしかないですね。

吉村 そつですね。マジックはないと思います。地道に伝えていくしかないと思います。

西浦 魅力は絶対にあるので、それが僕らの仕事もそうなんです。こつという家づくりをやっていることが伝わっていない、見られていないというだと思います。僕は営利目的ですが、国産材の需要というのは、国としても大きな課題です。ゴミ問題を考えていくと木質化に変わっていった方がいいと思っています。土に還るということとは大きな利点ですから。埋めても問題がないもの。今は、埋めてはいけない物は引き取ってもらえませんか。ゴミがコストを上げているのは大きな問題です。ヘーベルのALCもゴミとして捨てられません。レンガなど焼いた物は土に溶けないので砂のように小さく刻まないといけないとか。処理のためにコストがかかります。最終処分場が値段を上げています。解体費用が2倍、3倍になっています。とくにストックされていくもの、吉村さんが古民家を再利用して住んでいることを考えると新築ばかりでなく古民家をリノベーションしていくことは、国産材を使つひとつの近道だと思います。

件があれば、すぐに出せるので。そついうときにこれから乾燥しますでは、高温乾燥で表面がカリカリになって内部が割れていてという材になってしまつ。強度が最初は問題ないのですが、内部割れの状態になると仕口が弱くなるのでいけません。仕口が欠けたりすれば、よくない。ですから天然乾燥あるいはそれに近いかたちでやらせてもらっています。半年後、1年後に出ますと言ってもらったら用意して養生しておきます。建築家に仕事がないといけないと思っ

ているので、先ほどの建築家BOKをつくったのもそついう思いです。皆さんに繋がっていい

ば良いと思っています。

山のツアーをやるにしても、きちんと山に入る前に酒で清めて、山を歩く。山を下りてきたら、木を育てるのはたいへんだなと体感してほ

しい。そつすると少し違う視点から木を見てもら

えるんじゃないかと思っています。

吉村 僕も山を見せていただいで感動しました。良かったです。

川中としての使命
——国産材普及のために

阪口 建築家がいて、工務店がいて、我々製材所があります。建築家が仕事をとれば、工務店は下請けになります。工務店が仕事をとつたら、設計士は下請けなんです。どちらの場合も製材所はその下です。でも製材所が仕事をとつたら、共に仕事をやるのではないかと思っています。

それが吉村さんをお願いした「ラ・ベッシュ」です。うちに仕事があれば吉村さんに頼める。そついうシステムをつくっていければ、楽しい建築業界になるんじゃないかな。僕はそついうことをしていきたい。

この20年で1、000棟を超える建物に携わってきました。点が線になり、面になってきました。まもなく代表交代をします。次の目標は紹介する物件を増やして建築家、工務店と共に仕事をしていきたい。私が仕事をお渡しできれば、多少木材の値段が高くて仕事がないよりは、喜んでもらえると思っっているので、僕は適正価格を言えます。

設計者ありきで施工者がいて、僕ら専門業者がいて、家を建てる。仕事が少なくなつて設計者が減っていますが、一人でも多くの設計者に山に入ってもらつて、山の大変さ、そして大切さを感じてもらいたい。吉野の木だけでなく国産材を使ってもらいたい。日本の国全体が上がっていかないとけない。海外から化石燃料を使って木を運んでくるくらいなら、いったん鎖国してでも、国策として国産材を普及させない限り山は荒廃します。

さかくち・かつゆき／阪口製材所
にしうら・ひろまさ／建築家
よしむら・ただし／建築家

文責／編集部



上写真／阪口製材所吉野本社。木のトラス出来た大空間
下写真／「ラ・ベッシュ」外観



左写真／手入れの行き届いた吉野の山々を見渡す。吉野は自然条件が林業に適している。川上村や黒滝村、東吉野は秩父古生層の水成岩が風化した埴質壤土で、木を育てるための地味に富み、保水と浸透性にも優れている。年間雨量2,000mm以上あり、平均気温14℃と温暖。積雪も少なく、周りを山々に囲まれているため台風などの影響も少ない



上写真／阪口製材所吉野本社入口
下写真／阪口製材所と吉村さんが共同、大径材を使用して建てた洋菓子店「ラ・ベッシュ」





2階のカウンターからリビングを見下ろす



子供室から玄関、リビング方向を見る



右写真／リビングの吹抜けから明かりのこぼれる夜景。右手に階段室が見える
左写真／障子から柔らかな光が差し込むダイニングを見る。右手がキッチン。白い大壁の空間に木製建具が映える。リビングでくつろぐ阪口夫妻



2階カウンターから寝室方向を見る



ダイニングからウッドデッキを見る



配置図



上／1階平面図 1/400 下／2階平面図

世界遺産でも有名な奈良県吉野山。そこは自然が豊かで、春には千本桜、秋には紅葉と、年間を通して人々を賑わう場所です。その山の麓に、国産材の普及に大きく貢献されている阪口製材所のモデルハウスの計画をいただきました。後々住んでいただきたいとの思いで、ヒアリングは奥様も交えて行いました。

構造材はもちろんのこと、仕上げ材や建具材、下地材までも吉野の木にこだわり、杉、桧だけでなく広葉樹も用いて美しい空間を表現しました。

例えば天井材についてですが、外部には天然乾燥の油分の多い赤身材を使用し、内部はゆっくり経年美化する白身材の杉を用いました。

明るい印象の、お客様用玄関兼階段室で、プライベート空間とパブリック空間を分け、LDKは1階に、水廻りや寝室を2階にしました。南の軒は1間と深くし、夏と冬の日差しをうまく取り入れる工夫をしました。

西のテラスは周囲の環境となじみ、桜や紅葉を楽しめるように植栽をして、気持ちのよい場



敷地内には割箸用の吉野杉の端材が自然乾燥されている

所になりました。室内の壁は、漆喰の白と木の色とでシンプルにまとめ、何年経っても飽きがこない空間にしました。

住むご家族はもとより、訪れた方々からも心地よい空間と好評をいただいているようで、設計者として嬉しく感じています。

西浦敬雅